◇グループ共同記者会見◇

宮田新文化庁長官インタビュー

第22代文化庁長官に就任した宮田亮平新長官が4月12日、報道関係者のグループインタビューに応えた。インタビューの概要は次の通り。

―長官ご就任の抱負をお聞かせください。

宮田長官「就任の抱負は今まで言ってない。僕にとって何がしたいのかって言うと、自分が何かをやりたいということをやるのではなくて、皆さんが何かをしたいということを集約していって、それを国として逆発信して両者が一体となったときに新しい形態が出来上がるから、こういうことをやりなさいとか、こういう方針を作りなさいとか僕はあえて言わない。例えばよく大学が地方創生とか何とか立派なこと言うじゃないですか。それが芸大にはないんですよ。僕は何を言ったかというと〝世にときめきを〟。それしか言ってない。ときめきを創ることが芸大の仕事だと。

だからあまり大上段に構えてやるっていうのは僕はあまり好きでない。長官だから長官の態度は取りません。長官の態度ってどういうのか知らないもん。学長の態度も知らない。だから僕はいつも学生と一緒にやっていたし、ワイワイ酒飲んだり一緒にやったから、結局それでも学長なんだよね。最後に尻をちゃんと拭えるかどうかだよ。その責任をちゃんと取れるかどうかだよ。普段は全くニュートラルにお互いに戦い合う、語り合う、笑い合う、そこが大事なんですよ」

―地方では人口減少とか閉塞感が強まっている中で文化庁にどのような役割が果たせるとお考えですか？

宮田長官「文化庁によって働きかけることができることは、世の中の毎日の仕事の中で、毎日の生活の中でどれだけ楽しめるか。どれだけ幸せであるかということを確信させることのきっかけ作りをさせるのが文化庁の仕事だと僕は思ってます。これは経産省でもやれる話しだし、観光庁なんかもその一つに入ると思うんですけど、それはモノがなくちゃいけない。ただし文科省はモノがなくても、その中でときめきを創ることができるということがあるので、その違いがあるだけかもしれないね」

―文化庁の京都移転についてはどのようにお考えですか？

宮田長官「僕は何も考えてません。何故かと言ったら僕は今まで大学の中でもそうでしたけど、10年間芸大の学長をやって50年間芸大にいたんですね。芸大に入ってからずっと芸大を出たことがなかったんですね。ずっと芸大人だったわけです。あと6年間学長をやるはずだったのが、その1ヶ月後に『文化庁に来いよ』と言われたのでウ～ワ～っと考えて、違う所も面白いかと考えて来たんですけどね。本当にそうですよ。僕は大体物事は決断が早いほうなんだけど、1日だけ待ってくださいと言いました。10年前までは本当に下から3番目くらいのランクしかなかったのをトップAになったわけですよね。4月からそのトップAの最高の状態でド～ンと学長でやっていこうと思ったら、何だか訳の分からん所に来させられたんだよね（爆笑）。

だから本当にそういう意味では悩みましたよね。何をもって喜びを共有できるかが大学ではできたけど、文化庁ではできるかどうかという、その部分がとっても僕にとっては不安だったんですよね。でも、ちょうど10日目、〝あ、そうか。こういうことかな〟と思いだしてきたの。最初から方針は立てません。だって立てたなんて嘘だもん。架空だもん。実際に来たものに対して、現場で来た皆さんのようなお話しを頂戴して、その中から〝そうか〟と思えてきて形をつくっていくのが僕の仕事だと思ってる。だから今度ある会議の中の意見は僕は謙虚に聞きますよ。僕が最初から京都移転行くぞって言ったら会議にならないでしょ。会議で僕はゼロを意識して、腹の中では決まってますよ。どっちとも言えませんけど（爆笑）。言ったらお終いだもの。みんなに聞いて、その中から僕は判断します」

―省庁が移転するのは、これまでにないことですけど、どのような効果、メリットがあるとお考えですか？

宮田長官「例えばロスを考えたら、まず時間のロス。経費のロス。そういうものがある。それから人員的な要員が足らなくなる。それ以外に5、6個あるけどね。代表的に言ったらそんなもんだよね。そのロスを超えても行ったときの意味性があるかというときに客観視でき、競争ができるの。その良さがある。決して焼け太りしたいとは思ってないわけですが、当然ながらの人件費というのは必要になってくる。そうじゃないと無理でしょう。職員だけでずっとここにいたら、カビ臭い所にしかならないと思うんだよ。ちょっとカビ

臭いなと僕は思ってるんだけど（爆笑）。もっと明るい所にしたいの、僕は。

そのためには、来たことによって何かプラスが得られるなと。それから手ぶらで来るな。必ず問題定義を持って来てくれと。何でそれが難しいのかということを考えた上で、きっかけ作りのために来てください。それには豊富にあるから。文化庁の職員はものすごい頭のいい連中ばっかりだから。それに対する対抗的なものを必ず出してくれますから。そしたら本当に難しい問題点に対していわゆるカンフル剤を打ってくれるような感じがするんですよ。そうした時に新しいものが出来てきます。そのためには文化庁をもうちょっと利用、友達になる意識があるといいと思う」

――それは民間の団体とか普通の国民の方に利用してもらえるような？

宮田長官「そんな小さいこと言ってちゃダメだよ。政治家であろうと経済人であろうと、みんなむしろそっちのほうの連中のほうが結構欲しがってるんだよ、彼らは。渇望してるのよ。特に財界、経済人の人なんて渇望してますよ。喉カラカラよ。それを経済人同士で何だか良さげな話しして、それで経済論者と言われる立派な方がいて、こういうことやると上手くいくだとか。でも、それをそのまま自分の会社に持って行って、それが出来るかっていったら出来るわけねえじゃねぇか。

もっともっと大事なことっていうのは、全然違うところの人たち、違うジャンルをあえて聞くっていうことが、柔軟性を持った人間性が出来るんじゃないかなあなんて思った。そういうところに文化庁ってあってもらいたいと思ってるんですよ。もう初めから行ったときに答えが分かるようなところじゃない所であるというような良さがあっていいじゃないかなと思うんだけどね」

――文化庁の情報発信についてどうお考えですか？

宮田長官「常に文化庁はね〝生きた文化庁〟だ。出来れば僕が一番大事にしてるのは〝諸刃の剣〟であるメディアの方々なんです。ちょっとヤバいことがあれば八つ裂きにされる（爆笑）。その代わりいいことすりゃ多少書いてくれるんだよ。そこが僕はものすごく大事だと思うんですよ。特に文化庁というものの仕事がカビ臭いわけだから。もうこの3日間で僕は廊下を歩くだけでほとんどの人が僕に声を掛けてくれるようになった。それは宮田亮平を知ったからではないの。

一緒になって面白がって聞くような雰囲気が出来てくださると、これは嬉しいと思うんですよ。そうすると、そこからまた文化庁発信みたいな。いろいろと情報網を作っていただけたら嬉しいなあ。大学時代もメディアの人が来たものに対しては、なるべく断らないようにしてくれというふうに言ってます」

＝給付型奨学金の在り方など＝

奨学金制度の改善・充実に向けたＰＴ発足

省内議論をスタート

文部科学省は省内に「奨学金制度の改善・充実に向けたプロジェクトチーム」を発足。4月13日に第1回会合を開いた。

挨拶する義家副大臣㊥（㊨前川文科審、㊧常盤高等局長）

意欲と能力のある者が経済的理由によって大学等への進学を諦めることがないよう、また、教育費による過度な負担を負うことがないよう、奨学金制度については制度の充実に向けたあらゆる面からの検討が求められていることから、文部科学省においても具体的な制度設計等について早急な検討するもの。

義家副大臣「すでに国会での議論をはじめ与党各党においても給付型奨学金の創設についての議論が行われ、先日、総理にも要請されている。こうした状況を踏まえ給付型奨学金の在り方、無利子奨学金の拡充、新所得連動変換型奨学金等の奨学金制度の充実・改善について早急に検討を進めてまいりたい。政府全体で取り組んでおる一億総活躍社会の実現に向け意欲と能力のある学生が望む教育を受け、そして社会に出て活躍できるよう文部科学省としても教育費負担の軽減に取り組んでまいりたい。何をすればその財源が出て来るか、どのようにしたらそれが効果的にそれぞれの進路を望む生徒たちの具体的な応援になっていくのかということを丁寧にまず議論して意識を共有した上でスタートをしたい」